

令和元年9月8日現在

機関番号：32611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04589

研究課題名(和文) 保育における「二人称的かかわり」に関する研究

研究課題名(英文) Study on "second-person engagement" in early childhood care and education

研究代表者

林 浩子 (HAYASHI, Hiroko)

国立音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号：00587347

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、保育における「子どもと世界の二人称的かかわり」と「子どもと世界がか

わっている世界への保育者の二人称的かかわり」の関係構造を明らかにすることを目的とし、文献検討とフィールドワークを行った。その結果、以下のことを見出した。(1)保育は二人称的かかわりの二重構造である。(2)二人称的かかわりは、対象に共同注意することである。(3)二人称的かかわりを基盤とした「よさの追求」が文化的実践となる三人称的世界へとつながる。(4)二人称的記述は、子どもと保育者の一人称を豊かにする。(5)二人称的かかわりは対象を深く「知る」。これらが、保育の営みの二人称的転換を導く。

研究成果の学術的意義や社会的意義

保育におけるかかわりを、「子どもと世界(人、モノ、こと)の二人称的かかわり」と「子どもと世界(人、モノ、こと)がかかわる世界への保育者の二人称的かかわり」のかかわりの二重構造としてとらえて、その関係構造を理論的に明らかにすることにより、保育という営みそのものを見直し、実践の営みをより構造的に示す研究になった。さらに、保育におけるかかわりの二重構造を「みる」「記述する」研究者もまた、二重構造の営みに二人称的な眼差しを向け、かかわるといふ、二人称的かかわりの三重構造が現れた。それは、発達の主体である子どもの実像に迫ると共に、保育実践のみならず保育研究をも含んだ保育全体の営みの転換の探究となった。

研究成果の概要(英文)：The main findings of the study are as follows: 1)Early childhood care and education practice is constructed as double layer including of "second-person engagement", 2) "Second-person engagement" defines in this study as the way of joint attention to the subject, 3) "Exploring goodness" of early childhood care and education based on "Second-person engagement" leads the world of "third-person engagement" which is a form of cultural practice, 4) Writing the way of "second-person engagement" enriches child and an early childhood care and education practitioner her/his first-person, and 5) "Second-person engagement" makes the subject deeper "recognition" by feeling for her/him. The process leads to the transformation of "second-person engagement" in early childhood care and education.

研究分野：幼児教育・保育

キーワード：保育 保育研究 子ども 二人称的かかわり 「感じ入る」という知り方 「よさ」の探究 文化的実践 保育の営みの転換

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

N. ノディングズ (1997) は、対象との親密なかかわりを「ケア」という観点から論じ、ケアとは対象世界に入り込み、そこから世界を見直す（専心没頭 engrossment）と共に、対象を受容し共に感じる（feeling with）ことで対象を「知る」ことであるとした。この「共に感じる」共感性の考え方をより詳細に吟味し発展させたのがレディ、V (2015) の「二人称的アプローチ」である。レディは、人が対象（人、もの、こと）を理解していく際には、対象を自分と同じとみなし推察して相手を理解する一人称的アプローチ、対象を傍観的に観察し、理論や概念、あるいはカテゴリーであてはめて「客観的に」理解する三人称的アプローチ、そして、対象に親しみをもち共感的眼差しを向け、情感を込めて理解する二人称的アプローチの3つがあるとした。「二人称的アプローチ」は、対象を「ほおってはおけない、あらゆる呼びかけと要求（needs）にいつでも応答する」特別な他者となる関係を指す。

林・宇田川・岩田 (2013) は、赤ちゃんが人のみならずモノ（materials）とかかわるとき、モノとの対話を深めながらモノやモノを取り巻く世界を「わかろう」とし、自分の身体の動きを通して自分自身を知ると共に自分を広げていることを示した。そのような赤ちゃんともとの二人称的かかわりは、その世界を共に喜び味わう保育者の二人称的眼差しの中で生起し観察されていた。また、林・宇田川・岩田・佐伯 (2014) は、人的世界には開かれず、モノ的世界に固執する自閉的傾向の子どもの世界に二人称的にかかわり続け、その世界を丁寧分析した。自閉的傾向の子どものこととして、モノ的世界はモノに対して行為を起こすことで生まれる出来事との関連が一貫して解り易く安心できるのに対し、人的世界は行為に対する出来事が相手の思いや意図などで変わることから難しい。しかし、人的世界にはモノの「動き」とは異なる「何か」があることの気づきを通して、情感を基盤とした「よさ」の判断が介入することに気づくと、自閉的傾向の子どもの「心 mind」の介入に考慮した「人的かかわり」に開かれていく可能性を示した。このことから、子どもが人やモノ、ことにかかわり、関係をつくっていくとき、情感から生起される「よさ」（村井, 2013）（「心地よさ」とともに「望ましき」）への実感がそのかかわりを支えていることがわかった。さらに、林・宇田川・岩田・佐伯 (2015) は、自閉的傾向の子どもへの保育者の二人称的かかわりが周りの子どもたちへ伝播し、自閉的傾向の子どもが、クラスの子どもたちと一緒に自分たちにとって「望ましい」参加を可能にすることを示した。それは、「こうあるべき」という三人称の世界から始まる「望ましき」ではなく、二人称的かかわりを基盤とした三人称化（望ましきとしてのあるべき世界）が生まれることが確認された。つまり、子どもが世界と二人称的にかかわるそのかかわりに、保育者が二人称的にかかわることで、子どもたち同士の二人称的かかわりが拡散（感染）し、保育の営み全体が「二人称化」していく。佐伯 (1995) は「学びのドーナツ論」で、学び手である I が二人称的世界（you 世界）とのかかわりを經由する先にある世界を三人称的世界（they 世界）にとらえ、それは、より「よい」ものを生み出していく文化的実践への参加としている。このように、保育における「望ましき（倫理的善）、公正さ」の観点からの二人称的かかわりの展開が、保育実践の新たな転換をもたらすと考え、本研究に取り組んだ。

2. 研究の目的

本研究は「子どもが関わる世界」、「保育者と子どもがかかわる世界」の二つにおける二人称的かかわりの意味と関係構造を明らかにする。従来の保育がとかく「三人称的かかわり」であったことを問い直し、二人称的かかわりによって保育や保育研究がどのように開かれ転換されるのか、その可能性を探ることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の方法は、二人称的かかわりをめぐる理論的検討と、二人称的かかわりに視点をあてたフィールドワークを行うことで、保育研究を含めた保育の営み全体の転換の可能性を探った。主な視点は、①二人称的かかわりの意味と関係構造②保育実践を二人称的に「みつめ」「記述する」ことの意味③保育における二人称的かかわりを基盤とする三人称世界への道筋の3点であった。なお、フィールドワークは、イタリア・レッジョエミリア市の保育、鳥取県・仁慈保幼園、赤碕子ども園、都内幼稚園、特別支援学校で観察、インタビューを行った。研究対象園、保護者に研究及び発表への許可を得ると共に、プライバシー保護のため、登場人物は全てアルファベットで記載した。

4. 研究成果

本研究の主な成果は以下の5点である。

(1) 保育は二人称的かかわりの二重構造である。(2) 二人称的かかわりは、対象に共同注意することである。(3) 二人称的かかわりを基盤とした「よさの追求」が文化的実践である三人称的世界へとつながる。(4) 二人称的記述は子どもと保育者の一人称を豊かにする。(5) 二人称的かかわりは対象に「感じ入る」ことで、対象を深く「知る」。これらが、保育の営みの二人称的転換を導くことを見出した。

本報告書では、研究方法の視点にあげた②保育実践を二人称的に「みつめ」「記述する」の検討事例の一つを通して、上記にあげた研究成果を述べていく。

下記の記録は、人とのかかわりが困難だったK男（2年保育4歳児）が園庭の築山から水を流

し泥状になった斜面を滑り降りたことから、T男とのかかわりが生まれる場面を記した保育者の記述の抜萃である。

【記述 A】

・・・K男は築山からバケツに水を汲み、築山の上から繰り返し水を流す。築山の斜面が泥状になると、K男はバケツを置き築山の斜面を手でなぞる。突然、K男はバケツを置き、斜面の上まで駆け上り、ドロドロになった斜面を滑り出す(中略)K男の乱暴な動きにこれまで距離をとっていたT男が総合遊具からK男を見ている。T男は総合遊具から降り、斜面を駆け上りK男の後ろに立つ。他の子たちもやってくる。T男は先に滑り降りたK男の後ろ姿を見つめる。T男は自分の番になると勢いよく斜面を滑り降り、立ち上がって〇〇レンジャーのポーズをとる。するとK男は築山の上で同じポーズを取って、斜面を滑った後もポーズをとる。それからK男とT男は笑う(中略)その後、K男が水を汲んできて斜面から流し出すと、T男や周りの子も興味津々で同じ動きを始めるが子ども同士の会話はない。途中、K男は滑る順番でトラブルになりそうになるが、その場にいた子の存在を意識して順番を守った。K男が友達と同じ場でトラブルもなく30分以上遊べたのは初めてのことだった。

記述Aは子どもの動き(対象とのかかわり)が時系列で語れた抽象的な記述で、その場の背景や情景の説明がなされず、K男やT男の心の動きが見えてこない。保育者はK男の変容に気づいているが、外側からの観察の眼差し＝三人称的記述となっている。

ライル(1987)は、心は表に現れているそのものであり、心は名詞でなく副詞としてみることで、心は表情や、眼差し、しぐさから当人の情感や訴えが現れ、動作、存在、性質、状態を見ることの必要性を示した。

そこで、保育者は再度、K男やT男の心の動きが見えてくる記述(下線部分が加筆)を試みた。それが記述Bである。

【記述 B】

・・・K男は築山から3メートル横にある水道でバケツに水を汲み、築山の上から繰り返す。汗をかきながら水道と築山を往復するうち、自分の流した水の筋の上を歩くと築山の斜面が泥状になっていくことに気付く。K男はバケツをその場に無造作に置き、一心に築山の斜面を手でなぞる。突然、K男はハッとしたような表情でバケツを置き、斜面の上まで駆け上り、ドロドロになった斜面を満面の笑みで滑り出す(中略)K男の乱暴な動きにこれまで距離をとっていたT男が、築山から2m程離れた総合遊具からK男をじっと食い入るように見ている。T男は総合遊具から降り、斜面を駆け上りK男の後ろに立つ。他の子たちもやってくる。T男は自分の番が待ちきれない様子でその場ではねながら、先に滑り降りたK男の後ろ姿を食い入るように見つめる。T男は自分の番になると勢いよく斜面を滑り降り、立ち上がって〇〇レンジャーのポーズをとると、K男は築山の上で「ほおっ」という表情でT男を見つめ、T男と同じポーズを取って、斜面を滑った後もポーズをとる。それを見たT男はニヤリとして滑り降り、K男と視線を合わせて笑い合う。(中略)その後、K男が水を汲んできて斜面から流し出すと、T男や周りの子も「ハッと」したように見つめ同じ動きが始まる。子ども同士の会話はない。途中、K男は滑る順番でトラブルになりそうになるが、その場にいた子の存在を意識して順番を守った。K男が友達と同じ場でトラブルもなく30分以上遊べたのは初めてのことだった。

K男の土との二人称的かかわり

記述Bからより鮮明になったのは、人とかかわりが困難なK男が、土に心を寄せ、土の声に耳を傾け対話しながら、労を惜しまず自ら土に働きかけ、応答しながら土とかかわりを楽しんでいることが見て取れる。つまり、K男は土に二人称的にかかわっている。

対象に共同注意する

記述Bを書くとき、保育者は過去の出来事を現在でより鮮明に振り返り、「あたかも自分がその場において、K男が立つ築山の斜面の泥を自分も見つめたり、K男と同じように自分も泥に手を触れたりした感覚になった」と述べた。これは保育者がK男の視線に注目し、K男がみているもの、感じ入った(feel for)対象を、記述を通して共同注意しており、二人称的眼差しによる二人称的記述となった。

このように、「子どもがかかわる世界」に「保育者は二人称的にかかわる」のである。その構造を示したのが、図1である。

現象を二人称的に見る二人称的アプローチ

では、そのような子どもと保育者の二人称的かかわりを記述する保育研究はどうであろうか。保育者は自分の保育実践を日々記録する。また、保育研究に従事する研究者たちも保育を記述する。観察者となる研究者は、子どもにも保育者にも二人称的にかかわらないし、双方の関係でもない。しかし、子どもや保育者の二人称的かかわりを研究者が感じ取りながら、そこでの現象自体を二人称的に見て、意味を応答しないではいられないものとして感じ入る(feel for)、そのような研究は二人称的研究であり、言い換えれば、それは二人称的アプローチである。

その構造を示したのが、図2である。二人称的かかわりの二重構造である保育を、二人称的に研究する—そのような保育研究は、二人称的かかわりの三重構造である。

「よさ」の追求が文化的実践に向かう

T男は泥に心を寄せ、「より面白く」しようと土とかかわり、そのかかわりをT男が「面白い＝よい」と感じ自分もやってみた。2人が相互に模倣したのは、互いの「より面白い＝よさ」を交換していった。K男はT男と共に「よさ」を創り出し、共有していく心地よさに気づいた。だから、人とかかわりが困難だったK男が、互いの存在を意識して順番を守ったのである。ここにK男の「よさ」の芽生えが見て取れる。そして、このようなK男とT男の情感を基盤とする二人称的かかわりによって、K男自身が友達との関わりの中で相手の存在を意識し、順番を守ると友達と心地よくかかわれるという規範に気づき、自ら実行した。これは、初めに規範があり、それを守らせるのではなく、K男自身が「よさ」を発見し自らが実践を創り出している。K男がT男との情動的・二人称的かかわりを通して、三人称的世界である文化的実践に向かっていく姿が、二人称的記述により見えてきた。

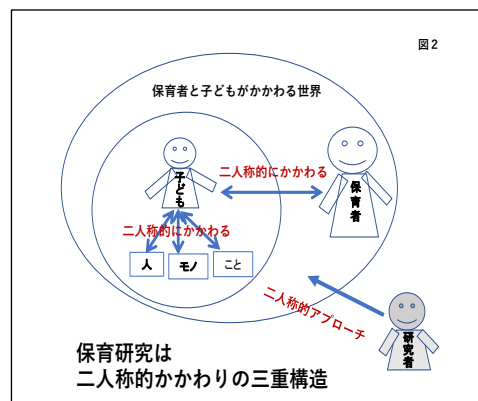
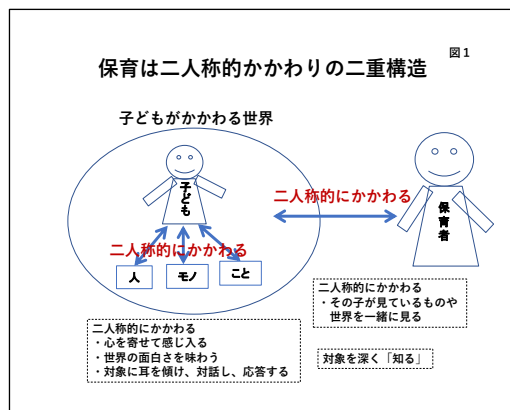
主体としての一人称の確立

ここで注目したいのは、これまで人とかかわりが困難だったK男が「互いの存在を意識して順番を守った」ということである。従来の見方や捉え方であれば、「友達と一緒に遊びたい思いが自己抑制を生む。友達とかかわりが重要であり、それゆえに、友達とかかわらせていかなければ」と捉え、援助に躍起になる傾向はないだろうか。二人称的記述によって、保育者である「私」が出来事を rethink (再考する), reflect (省察する), restate (言い換える) (レディ, 前掲書) した。それは、出来事を俯瞰し客観的に見ること (三人称的吟味) であった。すると、K男の思いや願い、訴え、それは主体としてのK男の「私」であるという一人称が明確になった。そのことによって、子どもへのニーズへの応答を可能にする。子どもの発達には友達とかかわらせなければと「ねばならない」援助ではなく、二人称的かかわりを基盤とした「よさ」の追求によってK男が友達とかかわっていく心地よさに気づき、それは、かかわることの「よさ」や面白さを共に探求していく三人称的世界＝文化的実践に向かうことに保育者が気付いた。これは、独りよがり一人称的かかわりや見方、或いは、客観的な三人称の見方に翻弄されない保育者としての一人称、保育者の主体としての「私」が作られていく。

対象に「感じ入る」ことで「知る」

K男は土と、そして、保育者は記述を通してK男と二人称的にかかわっていた。その中で、K男は土の性質や土との様々なかかわりを、保育者はK男の思いや願い、訴えを深く知っていった。二人称的かかわりは対象を深く「知る」という営みがあることがわかった。その知り方は、一般的な定義や理屈で知っていく知り方とは異なる。K男の土とかかわりでも見られたように、K男は心を動かしながら、情感的に土や土とかかわり方を深く知っていった。また、保育者はK男と土、K男とT男のかかわりを振り返り、二人称的に記述するとき、「あたかも自分がその場において、K男が立つ築山の斜面の泥を自分も見つめたり、K男と同じように自分も泥に手を触れたりした感覚になった」と述べている。これは、観察や他人事のように「感じる (feel of)」ではなく、対象の内側に入り、対象に「なって」感じ入る (feel for) という知り方 (Keller, 1983) である。

このように、二人称的かかわりは、対象に感じ入る (feel for) という知り方を可能にし、それは、知という営みを変換させていく。これまで、発達研究が、子どもや子どもの発達を内側から見る視点の欠如によって、子どもの生き生きとした実像に迫れず、発達の主体である子どもの希望が語られてこなかったことが発達研究の根本的に問題にあげられてきた (浜田, 1993、鯨岡, 2001)。しかし、本研究により、二人称的かかわりが保育実践のみならず、保育研究を含んだ保育全体の営みの転換し、それは、子ども、保育者、そして研究者の希望が語られる可能性を見出した。



引用文献

- Cf. Keller, E. F. 1983 *A feeling for the organism: The life and work of Barbara McClintock*. New York, NY. Henry Holt and Company.
 浜田寿美男 1993. 発達心理学 再考のための序説. ミネルヴァ書房.
 林浩子・宇田川久美子・岩田恵子 2013. 子どもがケアする世界をケアする. 日本保育学会第 66 回大会論文集 p148.

林浩子・宇田川久美子・岩田恵子・佐伯胖 2014. 子どもがケアする世界をケアする②自閉傾向のある子どもと人的/モノ的かかわり. 日本保育学会第 67 回大会論文集 p273.
林浩子・宇田川久美子・岩田恵子・佐伯胖 2015.
子どもがケアする世界をケアする：二人称的/三人称的かかわり. 日本保育学会第 68 回大会論文集 p125.
鯨岡峻・和子 2001. 保育を支える発達心理学 関係発達保育論入門. ミネルヴァ書房.
ノディングズ, N. 1997. ケアリング：倫理と道徳の教育：女性の観点から. (立山善康・林泰成・清水重樹・宮崎宏志・新茂之, 訳) 晃洋書房.
レディ, V. 2015. 驚くべき乳幼児の心の世界：二人称的アプローチから見えてくること. (佐伯胖訳) ミネルヴァ書房.
ライル, G. 1987. 心概念. 坂本百代, 宮下治子, 服部裕幸, 訳) みすず書房.
佐伯胖 1995. 学ぶと言う事の意味. 岩波書店.

5. 主な発表論文等

研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線

[学会発表] (計 6 件)

- ①林浩子・岩田恵子・宇田川久美子・佐伯胖. 子どもがケアする世界をケアする：保育の営みの二人称的転換. 日本保育学会第 69 回大会. 2016 年 5 月 7 日. 東京学芸大学(東京都小金井市).
- ②Iwata, K., Udagawa, K., & Hayashi, H.
Empathic understanding of children's caring world: Dialogues with materials in a Japanese Kindergarten. European Early Childhood Education Research Association. 2016 年 9 月 1 日. Dublin Ireland.
- ③林浩子・岩田恵子・宇田川久美子・佐伯胖. 保育の営みの二人称的転換: 保育実践を二人称的に記述するとは. 日本保育学会第 70 回大会. 2017 年 5 月 21 日. 川崎医療福祉大学(岡山県倉敷市).
- ④Udagawa, C., Hayashi, H., Iwata, K., & Udagawa, K. Constructing second-person approach relationship through the employment of joint attention: Process of transformation from engagement in materials to human relationship. European Early Childhood Education Research Association. 2017 年 8 月 31 日. Bologna Italy.
- ⑤林浩子・岩田恵子・宇田川久美子・佐伯胖. 子どもが感じる世界を感じる：感じることの意味とは. 日本保育学会第 71 回大会. 2018 年 5 月 13 日. 宮城学院女子大学(宮城県仙台市).
- ⑥Udagawa, K., Iwata, K., Toth, G., Udagawa, C., & Hayashi, H. Sharing Intention with an ASD Child through second-person Engagement. European Early Childhood Education Research Association. 2018 年 8 月 29 日.

[図書] (計 3 件)

- ①佐伯胖・岩田恵子・宇田川久美子 林浩子編著 2017 年 子どもがケアする世界をケアする：保育における二人称的アプローチ入門. ミネルヴァ書房
- ②岩田恵子. 2018 年 保育者に求められるもの. 渡邊英則・高嶋景子・大豆生田啓友・三谷大紀(編著) 新しい保育講座 保育原理. ミネルヴァ書房 (pp. 165-179)
- ③岩田恵子. 2019 年. 乳幼児期の学びの過程と特性②社会情動的学び. 杉村伸一郎・山名裕子(編) 保育の心理学. 中央法規 (pp. 157-168)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林 浩子 (HAYASHI, Hiroko)
国立音楽大学・音楽学部・教授
研究者番号：00587347

(2) 研究分担者

岩田 恵子 (IWATA, Keiko)
玉川大学・教育学部・教授
研究者番号：80287812
宇田川 久美子 (UDAGAWA, Kumiko)
相模女子大学・学芸学部・教授
研究者番号：90513177